

## 序

著者	小長谷 有紀
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	114
ページ	1-2
発行年	2013-06-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008920">http://hdl.handle.net/10502/00008920</a>

# 序

小長谷有紀

本書は、モンゴル国アルタイ山脈南麓に位置するホブド・アイマグ（アイマグは以下、現代の行政域を指す場合には便宜上、県としておく）ブルガン・ソム（ソムはアイマグの下位単位であり、以下、便宜上、郡としておく）で2008年におこなわれたインタビューのうち、1人の老人ノースタイさんによる語りのテキストである。

これまでSERで刊行されたモンゴルの口述史資料が、標準語により、論理的に秩序立てて話す大物政治家の語りであり、その意味で“エリートナラティブ”であったのに対して、本書における語りは、西モンゴルのオイラト（オイラド）のうちのトルグート（トルグード）方言で話されており、断片的な語りである。時間軸がしばしば前後し、重複も多い。

そこで、語りに必ずふくまれる年齢などを手がかりとして順序を入れ替えて整理した。いわば、時間軸をもちいて、語りを歴史化した。そうすることによって、地域史あるいは民族誌の素材として利用しやすくなっていると思われる。

しかし、語りの分析をおこなうには、語られた順序のほうが重要となると考えられるため、もとの語りの順序を確認することができるように、再構成する以前の録音番号を付しておいた。

資料収集のための調査は斯琴（スチン）によるものであり、転写、翻訳、解説も彼女が担当した。

現在、モンゴルにおいて「口承文芸」、なかでもトーリと呼ばれる「叙事詩」などは語り手が減少し、生活のなかで語られる機会が極端に減少していることは、調査概要に帰されたとおりである。そのため、「口承文芸」の研究は、閉じられたテキストの分析へと収斂する傾向がある。ところが、一方で、本書が示すように、これまで口承文芸の盛んであった地域では、ごく一般の、非専門家によって、祖先に関する記憶や自分自身の人生史が「口頭伝承」として生き生きと語られている。

こうした伝承は、「口承文芸」のように定型化した形をもたないため、「口承文芸」ほど伝承性が保証されていない。語り手とともに消え行く運命をもつ。それゆえに、こうして紙幅に記録されることによって貴重な一次資料として残るだろう。あまり語られなくなりつつある「叙事詩」にかわって、こうした「昔語り」を、今後の口頭伝承の研究を模索するための一資料として提示したい。

## 注記

音声資料は、まず、ウイグル式モンゴル文字で整理されていたため、モンゴル国での利用の便をかんがみ、本書では、ポップエ方式をもちいてローマ字転写した。こうした文語体で話されたわけではない。

モンゴル語テキストにおいては、意味がわかりにくいと判断される場合などに（ ）括弧を用いて語句を補った。日本語訳のテキストでは、モンゴル語の説明などに（ ）を用いており、単なる語句の不足は〔 〕で補った。モンゴル語テキストにおける注には、方言の解説が含まれるが、日本語では訳注であるため、両者は対応していない。

また、本書で示した音声資料番号の採録日時は以下のとおりである。

音声資料番号	採録日時	音声資料番号	採録日時	音声資料番号	採録日時
DM300080	2008.08.29	DM300101	2008.08.31	DM300153	2008.09.04
DM300081		DM300115	2008.09.01	DM300154	
DM300082	DM300116	DM300155			
DM300085	DM300121	2008.09.02	DM300156		
DM300087	DM300123		DM300161		
DM300090	2008.08.30	DM300127	2008.09.03	DM300164	2008.09.05
DM300092		DM300141		DM300165	
DM300095		DM300142			
DM300100					

なお、本書に登場する集団名は、一般に「トルグート」や「ホシュート」として知られているが、本書では、現地音に即して「トルグード」「ホシュド」で統一した。